

【垂井町合併70周年記念 垂井町歴史講演会】

立花宗茂と島津義弘

—垂井に同陣した両雄—

2024/10/20 於：垂井町文化会館 講師：桐野作人

はじめに—垂井に滞陣した立花宗茂と島津義弘

関ヶ原合戦といえば、主戦場となった関ヶ原町が注目されるが、隣接する垂井町にも布陣地や史跡がある。毛利勢が布陣した南宮山の東半は垂井町に属しており、その東麓には吉川広家や安国寺恵瓊の陣跡があるし、それと向かい合った東軍の池田輝政・浅野幸長の陣所跡もある。垂井町の史跡もまた関ヶ原戦跡の一部を成していることはもっと知られてもよい。

じつは、もうひとつ知られていない西軍の史跡がある。それは西軍大名の1人で猛将として知られた平塚為広の垂井城跡である。同城には関ヶ原決戦の1カ月ほど前、島津義弘と立花宗茂が滞在していた。ほとんど知られていないだろう。垂井と両雄の関係がたしかに存在したことを明記しておきたい。

そしてこの両雄の関係はそれだけではない。義弘は西軍の敗北のなか、有名な敵中突破＝島津の退き口を敢行したことで知られ、宗茂は京極高次が籠もる大津城を攻撃するという形で去就が分かれたが、両雄はまた大坂で合流し、共に海路、瀬戸内を下り、それぞれ領国に帰還する。さらにそれだけで終わらず、柳川城に戻った宗茂が黒田如水・加藤清正・鍋島直茂の大軍に開城したのち、今度は島津攻めの案内役をつとめるが、宗茂は徳川秀忠が大軍を率いて攻めてくる可能性があるから、早めに和睦した方がよいと島津方に忠告している。

じつをいえば、宗茂と島津氏の関係は天正14年(1586)の父高橋紹運が籠城した岩屋城の戦いから始まっていて、当初は敵対関係だったのである。しかも、間接的だが、宗茂にとって義弘は親の仇だった。それがなぜ厚い親交へと変化したのかも考えてみたい。

なお、宗茂は関ヶ原合戦前後、立花左近大夫親成と名乗っていたが、ここでは宗茂で統一している。また史料の表記は書き下しで現代仮名遣いになっている。

1. 両雄が垂井城にいた史料の紹介

まず宗茂と義弘が同時期に垂井城にいたことを史料で確認したい。

織田秀信の岐阜城が陥落する前日、慶長5年(1600)8月22日、家康重臣で東軍先手衆の軍監だった井伊直政が徳川秀忠率いる中山道軍の本多正信らに戦況報告した書状写しがある。

【史料①】『伊達政宗文書之二』699 井伊直政書状写し(抄)

本多正信など宛て、8月22日付

一、たる井(垂井)には島津、たちはな(立花)居り申し候由申し候、

井伊直政が岐阜城攻めの前日、池田輝政や福島正則らが城外に出陣してきた織田軍を米野の戦いで撃破したことを知らせるとともに、書状末尾で、大垣城後方の垂井城に宗茂と義弘の両勢

が入っていることも、中山道軍に知らせた内容である。もっとも、これだけだと写しであり、敵方の情報なので不正確かもしれない。しかし、同陣した義弘の書状にはっきりと書かれている。

【史料②】『旧記雑録後編三』1157 島津義弘書状(抄)

島津忠恒宛て、8月19日付

七月廿九日の書状、八月十七日濃州垂井に至って上着、^{ひけん}披見せしめ候、

【史料③】『旧記雑録後編三』1159 島津義弘書状(抄)

本田正親宛て、8月20日付

1352 → 立花殿事は千三百人のお盛りにて候え共、是もご馳走のため四千人召し列ね、今日^{こどもと}爰元^{かき}に上着の由に候、余りの国此の如く候処、さつま(薩摩)の仕立て僅か千人の内にて、爰元を仕舞い候事、幾度申しても面目なき次第、筆紙に載せ難く候、

→ 623石

【史料④】『旧記雑録後編三』1167 島津義弘書状(抄)

島津忠恒宛て、9月7日付

一、今程我等事、濃州大垣の城に堪忍仕り候、然れば八月廿三日敵相働き、岐阜の城詰め崩し候、その日大垣に押し通り、江州の通路に陣取り候故、廿四日より今月四日迄、内端^{うちば}よりの飛脚の通用一人もこれなく候つれ共、薩摩の人数伊勢口へまわり、同五日に押し通り候てより通用御座候、当城の事異議なく候間、お心安かるべく候事、 → 赤坂は東軍が占領

【史料⑤】「大津籠城合戦記」『続々群書類従』第十七

(9月3日頃、宗茂は)関ヶ原へ打って出んと、今筑紫上野介広門同道にて、その夜粟津に陣取って居られし趣聞こえたり、

【史料⑥】「立斎旧聞記」下 『続々群書類従』第三

宗茂公秀包上着あれば、^{やがて}頓而輝元も上り給う、斯て後宗茂は時分を見計らい、濃州に向かい玉うべし、その間は勢田の城に在城あるべしとて、大坂を打ち立ち勢田の城に入り玉う、

【史料②】から、義弘は8月17日には垂井に到着している。一方、【史料③】宗茂は3日遅れて20日に垂井に到着していることがわかる。両雄のうち、義弘の場合は何とかわかる。【史料④】から9月5日には大垣に入城している。したがって、垂井城に滞在していたのは17.18日間だったことになる。なお、義弘勢は垂井から大垣への移動は苦労があったようだ。というのも、岐阜落城後、黒田長政・藤堂高虎らが長良川を押し渡って中山道筋の赤坂を占領したために、中山道から大垣へ迎えず、ずっと南の伊勢口に南下、迂回して大垣城に入ったようである。

一方、宗茂の場合、一次史料がなくて正確にはわからない。後世の編纂史料【史料⑤】【史料⑥】は宗茂が垂井まで出張していないという前提で書かれているので、あまり信用できないが、9月3日頃、大津城の南の粟津(石山の近く)や瀬田(勢田)あたりに駐屯していたかもしれない。

■慶長5年(1600)、両雄の垂井在陣期間

島津義弘	8月17日～9月5日	その後、大垣城へ
立花宗茂	8月20日～9月2日(推定)	その後、栗津・勢田あたりへ

2. 意気込む宗茂と苦悩する義弘

関ヶ原合戦当時、宗茂は34歳で、一方の義弘は66歳という老齢で、親子以上に齢が離れていた。双方の立場は異なっていた。宗茂は大名当主であり、すべてを自分の裁量で決めることができたが、義弘は国許に兄の太守義久が健在で、軍事動員権を掌握していた。当時、島津家は9カ月も続いた庄内の乱で国力を消耗していたこともあり、義久はまた家康と懇意であったことから、家康とは敵対しないという立場にたっており、心ならずも西軍に属せざるをえなくなった義弘に援軍を送らなかったのである。

【史料⑦】『旧記雑録後編三』1098 島津義弘書状(抄)

島津義久宛て、4月27日付

爰元は百石に三人役に仰せ付けられ、奥州へ出張の由に候、当方の儀はお留守番に候条、百石に一人役に仰せ付けられ候えば、相調うべきかと存じ候、

【史料⑧】『旧記雑録後編三』1161 島津義弘書状(抄)

吉田清孝宛て、8月21日付

当陳美濃のうち垂井の宿へ、今ほどはこれある儀に候、然れば敵間五、六里ほどに候の条、近日防戦有るべきかと相待ち候、然る処当手無人の躰、是非なく候、然るに長宗我部殿は惣別二千の軍役に候え共、此度のご忠節のため五千召し列ねられ候、立花殿は千三百の役にて候え共、四千ほど召し列ねられ候、此の如く諸大名手柄に励まれ候の処、去春以来、人衆の儀申し下し候へ共、今日までは続き衆として一人も差し上げられざる儀、お国許のご談合心元なく候、

【史料⑨】『旧記雑録後編三』1157 島津義弘書状(抄)

島津忠恒宛て、8月19日付

連々御家中より在京の人衆七千人のお盛、兼日相定むる由承り及び候条、先ずその内を半分と存じ、三千五百ほど急度差し上げらるべき由、

もともと200人程度で上方に駐留していた義弘は西軍が挙兵したとき、兵力不足に苦しむのである。甥の島津豊久(日向佐土原2万8600石)が合流しても、せいぜい1000人弱だった。その後、義弘を慕う有志たちが上ってきて、最終的には1500人程度になったと思われる。

ところで、関ヶ原合戦における諸大名の兵数はどれくらいだったのか。よく知られているのは、明治時代中期に参謀本部が編纂した『日本戦史 関原役』に書かれた数字である。たとえば、石田

三成は19万4000石で5820人、福島正則は20万石で6000人とある。これはどのような根拠で算出されたのか？

それがじつは義弘が兄義久に宛てた書状が基準になっている。【史料⑦】には、家康が会津出陣に従軍する大名は知行高100石につき3人役(1万石だと300人)、上方の留守居の大名は100石につき1人役(1万石だと100人)という基準を設定したことが書かれている。『日本戦史 関原役』はこの数値を積算根拠にして、諸大名の兵数を機械的に算出したのである。

当時、島津氏の知行高は61万9430石だった。単純計算すれば、島津氏の兵数は約6200人になる(実際は軍役免除の無役高が21万石あるので、軍役高41万石では4100人か)。

【史料⑨】にあるように、義弘は100石につき1人役が難しいなら、その半分の3500人でもよいから急ぎ上京させてほしいと、国許の嫡男に懇願している。しかし、それさえも実現しなかった。

一方、【史料⑧】にあるように、土佐の長宗我部盛親(高知22万2000石)は1人役にもかかわらず、5000人も動員し、立花宗茂(柳川13万2200石)は1300人余でよいのに、3人役並みの4000人ほど動員していると、義弘は述べている。

兵数を見ても、宗茂の強気と意気込みが表れている。一方の義弘は大大名にもかかわらず、国許からの支援がないため、面目が立たないことに嘆くほかなかったのである。

3. 西軍敗北後、宗茂の秘策か 一大津城攻めから上洛へー

当初、西軍に属した京極高次(近江大津7万400石)は北陸に出陣したが、途中で東軍方に寝返り、9月3日、琵琶湖を渡って大津城に戻り、籠城支度を始めた。ちょうどその頃、立花宗茂は勢田に在陣していたとの説(「立斎旧聞記」下)があり、急ぎ大坂城の毛利輝元に対応を打診したところ、大津城攻めを命じられたとする【史料⑩】。一方、籠城した京極方では、粟津に陣取る宗茂や筑紫広門がまだ高次の帰城を知らないだろうと判断して夜討ちをかけようとしたが、重臣の黒田伊予が【史料⑪】のように反対した。

【史料⑩】「立斎旧聞記」下 『続々群書類従』第3

宗茂公是を聞き給いて、勢田より山越しに飛脚を立て、大坂輝元へ注進し玉うは、京極宰相大津の城に帰り入りして籠城せらる、近辺の事にて候えば、是に向かい候わんや、又濃州に罷り越し候わんや如何と尋ね玉う処に、唯大津に向かい給うべき由、輝元より返答ある、(後略)

【史料⑪】「大津籠城合戦記」 『続々群書類従』第17

仰せ尤も、去りながら立花は西国第一の猛将、世に知れたる武勇の達人、中々油断あるまじ、味方籠城の手初めに打ち負くるものならば、士卒の鋭気を拆くべし、

9月7日、高台院(北政所ねね)が側近の孝蔵主や木食上人を派遣して和睦を調停するが、不調に終わり、開戦となった。守る京極方は3000人、攻める西軍は1万5000人という。総大将は毛利元康(元就8男)で、城の北西の尾花川口から攻めた。毛利秀包・南条忠成らは京町口から、宗茂や筑紫広門は城東の浜町口から猛攻した。京極方は防戦したものの、13日には三ノ丸まで攻め込まれている。

翌14日、孝蔵主や木食上人らの仲介により、ついに高次は停戦に応じた。15日、高次は剃髪し、まず三井寺に入った。彼の身上を預かったのは宗茂で、本丸に入った。その後、高次は高野山に登っている。

しかし、まさにこの日、関ヶ原では西軍が敗北を喫したのである。さらに石田三成の佐和山城も落ちたことを知ると、宗茂は17日、^{早朝}大津城を引き払い、手勢3000人を率いて上洛し、三条寺町に布陣した。

現在、禁裏御所の東南に仙洞御所(上皇・法皇の居所)があるが、当時はその地に太閤御所、太閤御屋敷、大炊御門屋敷^{おおひみかど}と呼ばれる城郭があった。秀吉・秀頼父子が参内するときに使用する邸宅で、現在では「京都新城」と呼ばれている。発掘調査によって石垣などが出土している。

ここには太閤秀吉の正室だった高台院(北政所)が居住し、弟の木下家定が姉の守護として同居していた。しかし、秀吉の死後、豊臣政権の対立抗争が激しくなると、高台院は局外中立を保とうとして、「京都新城」を破却してしまう。公家の西洞院時慶の『時慶記』2には8月28日条「城の矢倉下さる由に候」とか、翌29日条には「南城の屏(堀)・石垣壊す由に候」など、破却の様子が書かれている。

突如、軍勢を率いて洛中に現れた宗茂は木下家定に使者を送った。それが洛中を騒動させることになった。

【史料⑫】「立斎旧聞記」下 『続々群書類従』第3

(宗茂は)手勢三千を引き具し、京都に上り三条寺町に人数を立て、木下肥後守(家定)に使いを以て申し玉うは、(中略)この上は定めて大坂ご籠城たるべし、然らばご同道申し、^{それがし}某もお城に入り候わんと存ずる故、使いを以て申し談ずる所なりと云い遣わし給えば、肥後守^{しゅうしやう}以ての外周章の^{てい}軀に見えたり、返答に申さるるは(中略)その事は^{ここともと}爰許諸事かたつけ、罷り下る分に議定を究め候わば、後日に罷り下るべく候とぞ返事せられける、この肥後守事は金吾中納言(小早川秀秋)の実父にて、太閤北政所の舎弟なるに依って、北政所と一所に大炊御門の屋敷に在りて、京都を護らせらるるの仕置也、宗茂公上洛に依って京都その辺の人々聞き定めたる事は無けれども、斜めならず騒動するの処に、北政所この使いを聞き玉い、以ての外に仰天ましまし、かちはだし(徒跣足)の軀にて禁中へ逃げこもり玉えば、^{それ}夫より京中騒ぎ立て、目もあてられぬ有様なり、

宗茂が木下家定に対して一緒に籠城しようと呼びかけたところ、家定は周章狼狽して言い逃れたが、高台院も驚いて「かちはだし」のまま取るものもとりにあえず、禁裏御所に逃げ込んだというのである。また家定の嫡男勝俊(のち長嘯子)^{ちやうしやうし}も伏見城留守居を命じられていたが、逃げ去ってこの太閤屋敷に潜んでいたが、この騒ぎのなかで若狭に逃亡したという(『時慶記』9月18日条)。

宗茂は家定に呼びかけたところ、家定はわずか2万5000石程度の小大名にすぎない。大坂城に入っても大した戦力になるとは思えない。むしろ、宗茂の狙いは高台院の大坂入城だったのではないだろうか。もし高台院が大坂に籠城すれば、関ヶ原で勝利した東軍大名が押し寄せてきても、福島正則ら豊家恩顧の大名は城攻めを躊躇する可能性が高い。そうすると、東軍は家康と豊家恩顧大名が分裂することになる。宗茂はそれを狙ったのではないだろうか。しかし、高台院は自

分の政治的な権威や立場を自覚していて、あくまで局外中立を保つべく禁裏御所に逃げ込んだという次第ではないだろうか。宗茂とて後陽成天皇のいる禁裏御所には手を出せないから。

その後、宗茂は大坂に下り、天満橋に布陣して毛利輝元と増田長盛に使者を送って、籠城を勧めて持口1カ所を所望したが、やる気のない返事だったため、2人の優柔不断をあざ笑って帰国することに決した。そして人質になっていた母親(宋雲院)を奪取し、さらに犬子島(現・江之子島、大阪市西区)の関所を破って帰国することになる。

4. 宗茂と義弘の厚い交友関係

立花宗茂は帰国に際して、盟友といってよかった島津義弘のその後が気になっていた。大坂ではすでに義弘戦死の噂が広がっていたからである。宗茂は島津方に使者を送って、人質になっている亀寿(島津義久三女、島津忠恒正室)などを国許へ送り届けようと格別の温情を示した。

ところが、義弘が存命だとわかると、宗茂と義弘は共に船団を組んで瀬戸内を海路西に進み、それぞれ帰国することになった。

帰国後、柳川城の宗茂は黒田如水・加藤清正・鍋島直茂らの大軍に囲まれ攻められて開城の憂き目に遭う。また開城の条件として、島津攻めの先鋒に立つことになった。10月下旬、肥薩国境に東軍方の黒田・加藤・鍋島そして立花勢が押し寄せてきた。そこでもまた、宗茂は義弘たちに機密情報を知らせて徳川との和睦を勧めるのである。

【史料⑬】「帖佐彦左衛門覚書」『旧記雑録後編三』1374

立花飛驒守殿、此方へお使有りけるは、御前様(亀寿)御事は築川(柳川)の如く
ご同心成られ、お国許へお送り成らるべきとの御事にて、九月十九日の晩にご出舟
有るべしと相定め候処、 殿様(義弘)境(堺)へお着き給い、境より使者有りける
は、(中略)然る間、立花飛驒守殿へこれらの由仰せ遣わされければ、立花殿仰せ
は、まず兵庫頭様(義弘)ご安堵成られ、ご下向の儀大慶に思し召さるる也、私も今
晩打ち立ち申し、川口迄ご同心有るとぞ、ご同舟にて川口へお下りお船へお乗り移
り給い、ご下着の儀誠に／＼不思議の御事なり、

【史料⑭】「惟新公関原御合戦記」『島津史料集』

従船共に五十余艘也、時に立花左近将監宗茂兵を率いて帰国す、その船五十余
艘、海路を共にす、二十六日船を芸州日向泊に繋ぐ、宗茂義弘の船にきたり、喜悅
の余り落涙数行、死を逃るゝの幸いを賀じ、往事を談じ、再会を期して相別る、

【史料⑮】『旧記雑録後編三』1256 立花宗茂書状(抄)

島津義久・義弘・忠恒宛て、10月27日付

一、江戸中納言様(徳川秀忠)薩州お改めのため、近日ご出馬の由に候、諸勢打ち
下り候、(中略)天下ことごと悉く静謐せいひつに候て、はやお国割に罷り成り候間、この節の儀ご
分別を遂げられ、急度中納言様きつとご出馬これなき以前、お使者指し出され、お侘び
言もつと尤もと存じ候、拙者一命にかけ候て、随分お使いを申したく候、

宗茂

最後に一宗茂の臥薪嘗胆と柳川復帰一

かくして、宗茂の忠告もあって、島津氏は家康との和睦に踏み切り、3年近くの長い交渉の末、義弘の助命と本領安堵を勝ち取るのである。

ところが、島津氏よりずっと早く開城したにもかかわらず、立花家は改易の憂き目に遭い、宗茂は牢人となる。その後、6年後の慶長11年(1606)、奥州棚倉領主として小大名となり、さらに元和7年(1621)、ついに柳川復帰となる。まさに20年以上の臥薪嘗胆だった。

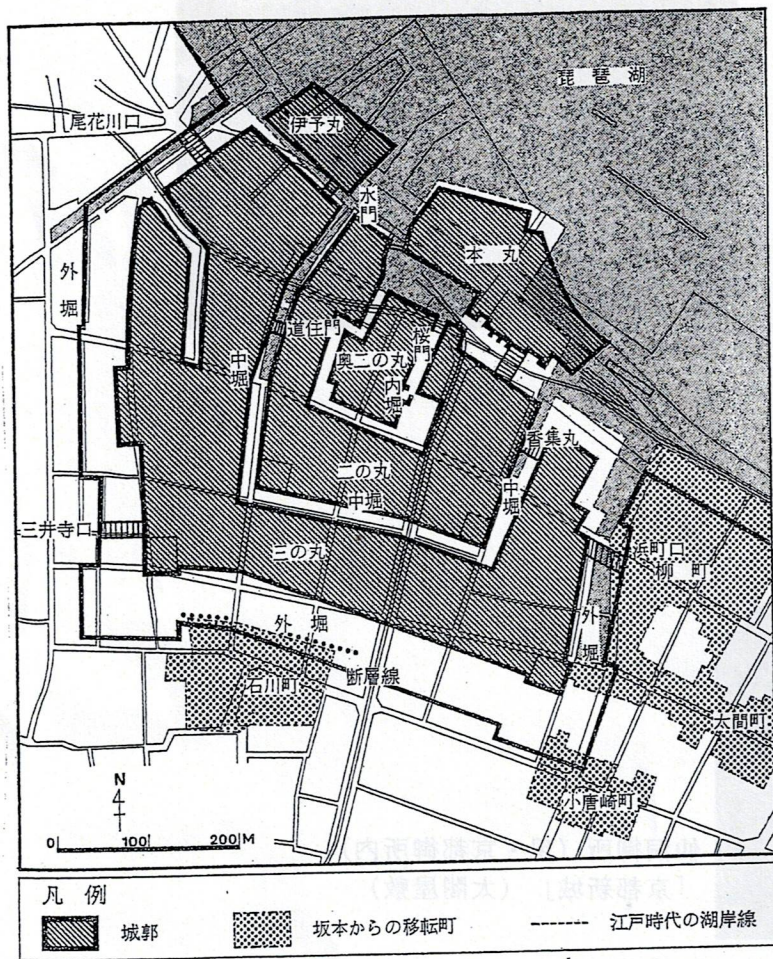


図16 大津城復元図 大津城は、天正14, 15年(1586, 87)頃、坂本廃城ののち、その遺材を利用して、浅野長吉によって築造されたといわれる。この復元図は、過去の大津城研究(本文参照)の成果をふまえ、新たに実測調査を行なって作成した。図では、大津城の城郭と、築城時に坂本より移転した町、江戸時代の湖岸線、および現在の湖岸線(図のうち湖中に引かれた実線)を合わせて図示した。この図から、大津城の本丸跡が、のちの大津代官所・御蔵に、また、外堀・中堀の一部が、関(荷揚場)として利用されたようすがよくわかる。

新修大津市史近世前期第三巻

史料① 伊達政宗文書之二

六九九 井伊直政書狀寫

一石治少此節者岐阜へ切々見廻申、其上河手と申所ニ陣取申候事も候
處川越候而大柿へ引入、もの見を一人此筋へ出し申事無之候、今日
赤坂邊迄も押申候者、夫方佐和山へふけ入可申候と、何もわらい申事
候、一とる井伊島津とちを居申候由申候、恐々謹言
(慶長五年) 八月廿二日 井伊兵部少輔 直政

史料③ 旧記雜錄後編三

1159 「御文庫四拾八番箱中」

猶出水之儀者、國堺之儀候間、惣別在國之人衆へ
彼表へ在番可申付候、其外衆中氣任無之様ニ、連々
之置目稠可申付儀專一候、乍勿論貴所事者在國候而、
諸式可申付事肝要ニ候、將又長宗我部殿事者、惣別
人數式千人之御盛にて候へ共、秀頼様へ爲御馳走
五千人被召列、近日勢州へ着陣之由候、立花殿事ハ
千三百人之御盛にて候へ共、是も爲御馳走四千人召
列、今日爰元ニ上着之由候、余國如此候處、さつま
の仕立僅千人之内にて、爰元を仕舞候事、幾度申て
も無面目次第、難載筆紙候、兼又從隣國爲何儀を申
來候共、疎忽成分別、努々有間敷候、然者中書事へ、
此方佐土原へ注進候てより、人數早當陣ニ上着候、
然處出水・帖佐兩役人として一到來無之事、更以無
心元候、
(中略)
八月廿日 (義弘) 維新(花押)
本田六右衛門尉とのへ (正徳)